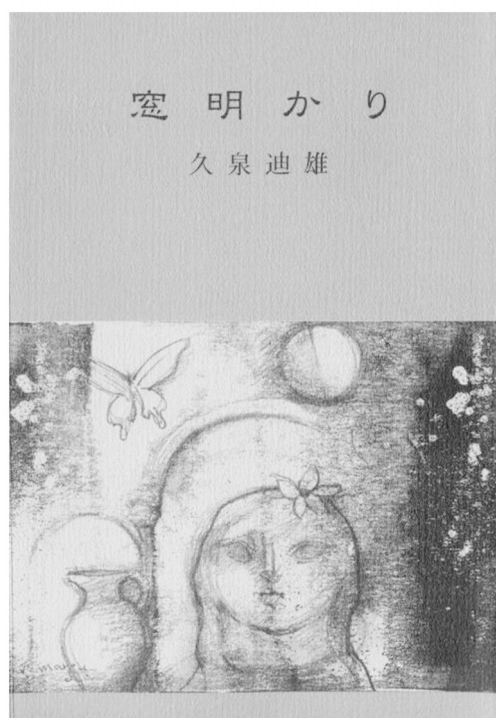


青山兵吉と寺田寅彦

四宮義正

平成 27 年 (2015) 7 月の中谷宇吉郎雪の科学館友の会の講演会は久泉迪雄氏による「戦中派世代の心に生きる中谷宇吉郎」であった。内容は多岐にわたるが、氏が金沢工業専門学校で学んでいた時の物理の先生であった青山兵吉にも触れられた。大変厳しいスパルタ教育の先生であったそうである。

同氏の『窓明かり』(2003 年、桂書房)にこの青山兵吉のエピソードが書かれている。



『窓明かり』の表紙

ある授業時間、私の実験台の横に立たれた。ちょうど反発係数の実験をやっているところだった。何かまずいことをしたかな、と、一瞬ギクリとした。ところが先生は鉛筆をとって、記録用紙の余白に、
歯車のアームの蔭の若葉かな
と一句をお書きになった。そして、「君たち、機械技術者になっても、自然の美しさにはっとする気持ちを忘れないでね。」とおっしゃってニコリとされた。嬉しかった。思わずうなずいて先生に頭をさげた。

上記引用の前に死亡時の新聞記事が転記されているが、東京帝大理科大学実験物理学科を卒業、とある。また続けて寅彦日記に青山兵吉が出てくると書かれている。そこで日記を調べると、大正 7 年～9 年にかけて散見された。転記してみる。

大正 7 年 3 月 16 日(土) 朝出校 学生秋山青山両君と spark の実験結果の Review をなす。

6 月 27 日 (木) 青山兵吉君来り試験成績につき話あり。

7 月 1 日 (月) 夜秋山佐瀬両君来訪、青山君は成績発表前より旅行に出で帰らず皆心配し居る由なり、夜遅く電話にて青山君帰京を報じ来る。

7 月 2 日 (火) 青山兵吉君来り旅行中の出来事を談る。

9 月 15 日 (日) 午前青山君来る。

大正 9 年 2 月 6 日（金） 夕方青山兵吉君が来た、実験中の日本刀の切れ味の data を見せに来た、大分面白そうである。

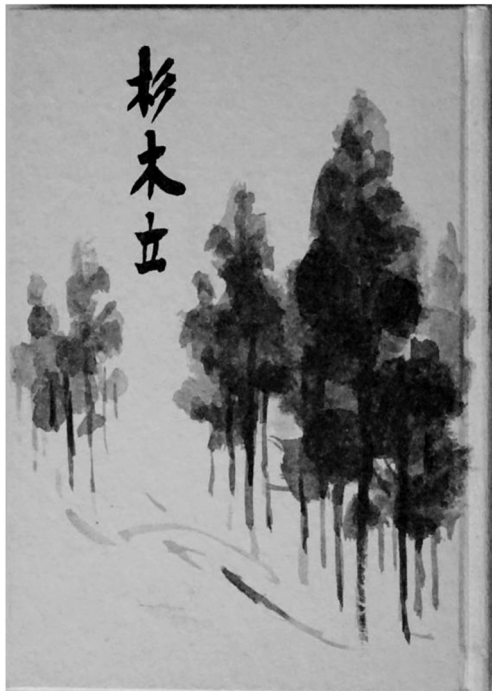
5 月 3 日（月） 青山君から『朝の光』といふ歌の雑誌をよこした、宇都野研氏が主領株らしい。

6 月 14 日（月） 青山君来る、来年より新潟の高工へ就任の筈にて器械等購入予算を出す故見てくれとの事。

7 月 27 日（火） 青山君来り金沢高工の為の物理器械予算書を見せらる。

寅彦全集科学篇によると spark（スパーク、火花）の論文が出るのは大正 15 年の中谷宇吉郎、湯本清比古との共著であるが、随分前から学生を指導してスパークの実験を始めていたことが分かる。また自宅を訪問したり試験の成績や赴任先での設備の準備について相談できる関係だったこともよく分る。「新潟」は「金沢」の思い違いであろう。

青山に『杉木立』（昭和 43 年、金沢工業大学旦月会）という歌集がある。「あとがき」に次のように書かれている。



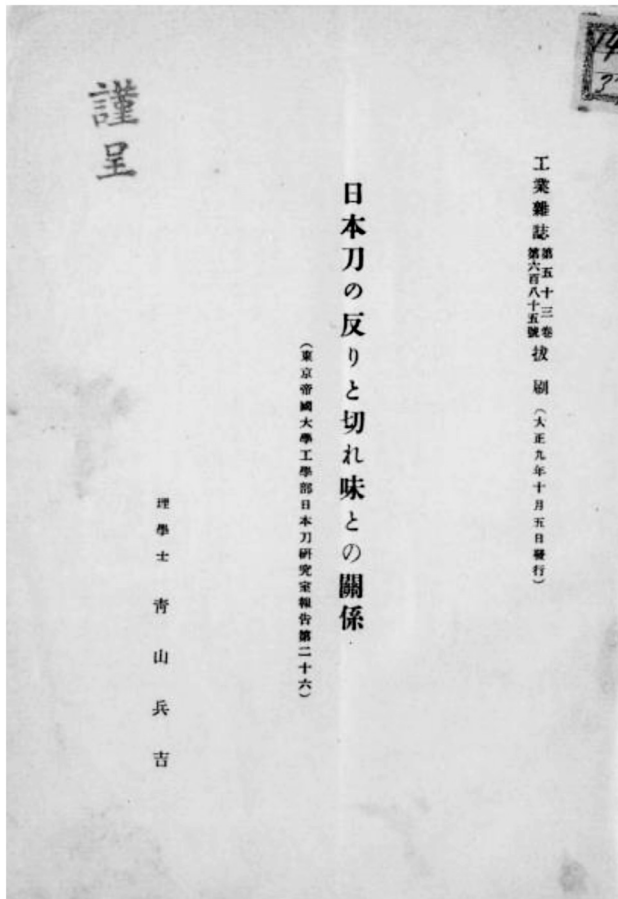
『杉木立』の表紙

寺田寅彦先生にも物理学以外の文学というようなことで御教えを受けた。私が冶金学の俵国一先生の日本刀研究室にいた頃のことである。思い出のなかの「日本刀の反りの理論……」の歌を寺田先生に見てもらった。先生はどんな理論か見せろといわれたので、俵先生にも話しこれを物理学会に発表した。これが私の処女論文というわけで、私にとっては忘れ得ぬものであるので恥を忘れて巻頭に載せた。その後宇都野氏と識り『朝の光』という歌誌を出すことになり、この集の大部分はその頃のものである。

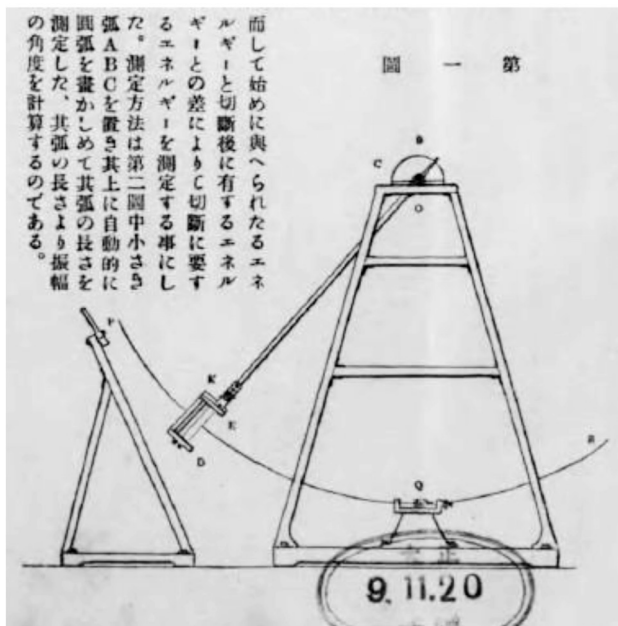
この巻頭歌は、

日本刀反りの理論を発見し ただうれしくてこおどりをする
である。これは大正 9 年 2 月 6 日の寅彦日記と見事に符合する。

また、この論文は「日本刀の反りと切れ味との関係」で東京帝国大学工学部日本刀研究室報告第 26 として『工業雑誌』（大正 9 年 10 月 5 日発行）に発表されている。



青山兵吉の論文表紙
(国会図書館蔵)



論文の「切れ味測定器」の図

理学部を卒業して工学部の冶金学科に在籍していることは異色であるし、研究テーマも独特である。寅彦の人脈の豊富さがよく分かる。

宇都野研（明治 10 年～昭和 13 年）は愛知県出身、小児科の医師で寺田家のかかりつけ医の一人であり、歌人でもあった。寅彦は大正 13 年、『朝の光』に「宇都野さんの歌」を投稿している。また、宇都野は寅彦が亡くなった後「逝きし人々—寺田寅彦さんと生田長江—」を書いて故人を偲んでいる。

先の新聞記事の青山の経歴に生年は書かれていないが、愛知県出身で平成元年（1989）に 98 歳で亡くなったとある。単純計算すると明治 24 年（1891）生まれということになる。大正 7 年（1918）～9 年は推定で 27 歳～29 歳となり、かなり遅い大学時代だったようである。その後、金沢高等工業学校教授、金沢大学理学部教授、金沢工業大学学長などを歴任された。

久泉氏の中谷宇吉郎への傾倒ぶりは戦中に『雪』を手書きで写したということによく理解できるが、青山兵吉を通して寅彦の自然に不思議を感じる心を受け継いでおられるのだと思ったことであった。